

## 令和3年度 第1回 稚内市総合教育会議 議事録

### ◆ 日 時

令和3年12月1日（水）午後3時00分 開会 / 午後4時30分 閉会

### ◆ 場 所

稚内市役所5階 正庁

### ◆ 出席者

(構成員)	市 長	工 藤 広
	教 育 長	表 純 一
	教育委員	山 本 泰 照
	教育委員	門 間 奈 月
	教育委員	佐 賀 孝 博
	教育委員	伊 藤 輝 之
(職 員)	教育部長	佐 伯 達 也
	子ども子育て対策監	細 川 早 苗
	教育総務課長	西 角 尚 人
	学校教育課長	山 川 忠 行
	社会教育課長	青 木 秀 貴
	スポーツ・レクリエーション担当主幹	中 村 直 樹
	教育総務課主査	市 川 美 紀
(事務局)	企画総務部副部長	遠 藤 直 仁
	企画調整課主査	木 村 博 之
	企画調整課主査	柴 田 憲 一
	企画調整課主事	森 本 静 流

### ◆ 協議事項

#### (1) 教育課題について

- ① 児童生徒の学力向上対策について
- ② コミュニティ・スクールを活用した地域との連携について
- ③ 学校における諸問題について【非公開】

#### (2) その他

## 1. 開会のことば

### 【事務局（企画総務部副部長）】

本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。時間ですので、ただいまから令和3年度第一回稚内市総合教育会議を開催致します。事務局を担当しております企画総務部副部長の遠藤と申します。よろしくお願いいたします。それでは始めに工藤市長よりご挨拶を頂きます。

## 2. 市長あいさつ

### 【工藤 市長】

皆さん大変お仕事でお疲れのところご出席いただきまして、まずはお礼を申し上げますと共に、この会議の趣旨等については何度も繰り返し説明しておりますので、その点についてはあえて申し上げませんけれども、今日はお手元に配布の次第のとおり、昨年も報道等で各地域の結果が様々取り上げられておりますが、先般発表された全国学力テストの結果と、それを受けての「児童生徒の学力向上対策」、これが一点目。それから二点目は、法改正によって設置努力が義務化された、学校運営協議会に関する「コミュニティ・スクールを活用した地域との連携」。三つ目が「学校における諸問題」。これについては非公開で協議を行いたいと思いますが、この三項目について今日は色々とお話をさせていただきたいと思っております。この会議の狙いでもあります。教育委員の皆さんとぜひ適切な情報交換、そしてスピーディーな判断ということのために、共に努力をしていきたいと、そのように考えておりますので、忌憚のないご意見をというふうに思っております。なお、この後は私が進行役を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げ、措辞ではありますが、開会の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

### 【事務局（企画総務部副部長）】

会議の開催に当たり、事務局から説明したいと思います。議事録の署名については、運営要綱第7第3項の規定により、伊藤教育委員を指名させていただきますので、よろしくお願いいたします。なお、議事録については、事務局が作成をいたします。また、本会議は原則公開で行うこととなりますが、先ほど市長からもお話がありました、協議事項の三つ目の「学校における諸問題」については、関係者の個人情報等を保護する観点から、運営要綱第5の規定により非公開とさせていただきます。傍聴される方・報道各社の皆様におかれましては、協議事項の2つ目が終わりましたら、ご退席いただくこととなりますので、ご了承をお願いします。それではこの後、工藤市長より進めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

## 3. 協議事項

### (1) 教育課題について

#### ①児童生徒の学力向上対策について

### 【工藤 市長】

それではさっそく協議事項の一つ目、教育課題のうちの「児童生徒の学力向上対策について」という

項目を取り上げたいと思いますけれども、教育長から説明をお願いします。

#### 【表 教育長】

私の方から説明します。稚内市の「児童生徒の学力向上対策」、これは総合教育会議の中でも何度か話をさせていただいておりますが、現状について報告をし、それに対する対応策についてもこの場で議論をさせていただきます。お手元に資料が配布されていますが、全国学力学習状況調査の結果の報告内容が先般報道等でも出ていますとおり、11月29日に道教委の方から色々な資料が発表されております。その中で最初に、北海道管内の平均正答率の分布というもの。これはいつもこの場でも配布させてもらっております。これは北海道が配布した資料でありまして、その中に稚内市の数字というものは詳しく載っておりませんので、今日はこの総合教育会議のメンバーには稚内市の数値を入れております。稚内市の数値そのものは、公表しないことになっておりますので、報道や、傍聴者の方にはその数値は入っておりませんが、このとおり稚内市の数値をあえて入れて、この正答率の分布を今回作成をしております。令和3年度については、決してまだ全道、全国には届いていないんですけど、今まで行っている中で一番全国に近づいてきている、そんな状況になっております。その前の令和2年度は、試験はありませんでしたので、令和元年度、それからその前の平成30年度の分布を。平成30年度はちょっと方法が違っていて、小学校の国語と算数、中学校も国語と数学の問題がA・Bと分かれていたもので、細かくなっておりますけれども、令和元年度からは基本的にA・Bが一緒になった問題で今のやり方と方法は一緒であります。そんな中で特に小学校国語、算数、中学校国語、数学が、公表されている資料から見ても、宗谷は本当に令和元年度が相当低い所に、小学校、中学校ともあったと。それから平成30年度においてもほぼ後半、一番下の方に宗谷が位置していると。そんな状況の中で稚内もほとんど変わらない状況でありましたけれども、令和3年度においては少しずつ前の方にと申しますか、相対的に言うと少しずつ前の方に上がってきていると。そんなふうに我々は分析をしておりますし、それについては今までやってきた授業の改善だとか、それから先生方の意識の問題であるとか、それからずっと続けてもらっております、3・4年生を対象にしたグングン塾など、今までの効果が少しずつではありますがありますけれども、経過として表れてきているんだろうと考えているところであります。一番最後のページに、教科全体の状況のレーダーチャートがあると思いますが、これは令和3年度と令和元年度を比べたレーダーチャートですが、全国平均を正多角形で表してまして、特に中学校は、今までなかなか正多角形にならない状況で、面積も小さかったんですけど、令和3年度は少しずつ正多角形になってきていると。そんな状況もありますので、一般的に今まで厳しかったものについても少しずつ改善をしてきている。ピンポイントで弱かった所も少しずつ改善して、レーダーチャートの大きく引っ込んでいた所を、正多角形になるような対処法が取られているというのがレーダーチャートからも見られるなと思っています。全道・全国を上回っているわけではないですし、我々としては、今まで言っているとおり、宗谷管内全体でも全国平均プラス10点くらいを目指してやっていこうというような思いもあり、そんなことで進めていますので、まだまだ改善する余地は多々ありますけれども、少しずつ改善してきているということについては、結果報告からも読み取れると思っております、今後とも更なる授業改善を含めて、それを進めながら学力の向上に努めていきたいと考えているところであります。

#### 【工藤 市長】

今教育長の方から学力テストの小学校、中学校の国語、算数、あるいは数学の結果の説明がありました。相対的には、満足とは言えないけれども伸びているんだと説明がありました。この件について、ご意見等ご発言があればお願いします。

【山本 委員】

去年、コロナの関係で学校に行く時間数も随分削減されていると思います。その中でこのような結果が出ていることなんですが、これが中学校の学力の関係、小学校はまあまあいいところにいるんだと思うんですけど、どちらかと言うと、中学校の学力の数学や英語はまだまだこれからどういったやり方がいいのか、まだ模索していかないとならないのかなと思います。いつも申し上げていますが、去年あたりから道教委の方でも IT と言いますか、インターネットを使った授業や教材の配信などがこれからだんだん積極的にされていかれると思うので、そういうのを活用していければ、改善の余地はあるのかなと思っています。

【工藤 市長】

佐賀先生いかがでしょうか。

【佐賀 委員】

色々と振興局からも支援をいただいて、学び方や教え方とかの工夫をされているというのは、学校を訪問させていただいてわかるかなと感じておりました。せっかくパソコンが一人一台で当たっていますので、ある中学校だといわゆる学習ドリルのアプリみたいなものを3ヶ月くらい試行的にやってみるといった話もあったので、その成果がきちんと出るのであれば、少しそういったものを取り入れ、お金がかかることなのですぐには難しいかもしれないですけど、そういうものを考えてみてもいいのかなと思っています。

【工藤 市長】

伊藤さんいかがでしょうか。

【伊藤 委員】

今年度を見ると、色々これまでの手立てが有効に働いてきているのかなと見えるんですが、来年を見たいという気はしますね。当然1年ではわからないので、今の手立てが本当に効果を表せられるのかというのはもう1年、2年見た方がいいと思うんですけども、佐賀先生からあった全校全員配布をしているタブレットの有効活用というのも多分全校どこの学校もやり始めると思うので、出遅れると逆にダメージが大きくなってしまいうんじゃないかという気もするので、タブレット端末を上手に活用していくというのは、早めに着手した方がより効果が高まっていくというか、全国から離されないで済むのかなと思って、そこは結構大変だと思うんですけども、やるべきじゃないかと思っていました。

【工藤 市長】

門間さんいかがでしょうか。

### 【門間 委員】

学力としては、問題を解いたり、実際の勉強の中で慣れてくると上がってくるとか、応用力も付いてくるところもあると思います。そうしながらも、もう少し広く見た時に、考えたりとか物を読むときにも、文字を追う目の使い方というのがどうしても発育、発達のところからうまく使えていないお子さんとか、脳の発達というところに体の運動機能は直結している部分はともあると思うんです。そういうところの不足している子どもはどんどん遅れていきがちというところもあると思うので、実際学校に上がったからのこのように数値化される、評価される学力も大事なんですけども、今実際に発育段階にある幼少期や小学校の低学年の子どもたちにとって、学力とともに大事なのは、体をしっかり使って、体の運動から脳をしっかりと使えるようになるというのも今とても研究が進んでいっているんです。私は仕事柄、そのようなところから、どうやって子どもたちの学力も含めた身体機能、脳の機能をとるところを高めていくかということ日々考えているんですけども、そのときに便利なタブレットとか評価される数字に見える部分と、そうではない所の方が、実は全体的な能力からみると、そういうコントロールする機能はかなり大きいと思うので、両方からサポートしていく。表面のところでは努力したのが小さな変化が積み重ねられるとも思うんですが、底上げというところでは、私は幼稚園、保育園に入っていく機会が多いんですけど、子ども達には影響が出ている部分も実際肌身で感じておりますし、そこに着手するかどうかというところでタブレットやその他を含めて、底上げして行って、先に繋げるというのは考えていただきたいと思います。可能性はともあると感じています。

### 【工藤 市長】

皆さんの意見を聞いて、このグラフだけを見て言うのは早計かなと思うんだけど、最初に思ったのは、北海道が随分レベルが下がっているなという感じ。というのは単純に見ると全国平均を令和元年度は超えている所がたくさん目立っているけれど、随分その所がなくなっているなという感じと、単純にぱっと見ると、小学校はさっき説明の中にあつたように全国平均や全道平均に振り切れまいとして、必死になって頑張っている、それが数値として上がっているなと、出ているなという感じはこれだけ見ればわかるけれども、中学校の方はほぼ振り切れそうだなという具合にしか見えてこない。それは平均がどこにあるかにもよるし、単純な評価にはつながらないと思うんだけど、見るとなんとなくそういう姿が非常に、単純に読み取れるような気がするので、ここはその結果に合わせて、頑張っているのはよくわかるんだけど、なんとか振り切れないで山の高い方に少しでも近づくようにさっきの話のとおり頑張ってもらいたい。一番心配なのは、北海道全体のレベルが下がっているんじゃないかなというのが非常に心配なんですけど、私も道新や地方版もあちこち見るけれど、みんな関心が高く取り上げている。だから、上がっている所もあれば、下がっている所もあるからその個々の話は別にしても傾向としてはちょっと心配だなと、北海道に関しては。それとうちのまちで言えば、小学校と中学校で言うと、この姿だけを見ると何とか頑張って振り切れまいとしている所と、ちょっと振り切れそうだなというその傾向が、はっきりと出てきているなという印象があります。

### 【表 教育長】

今の市長のご指摘、中学校は前回よりも相当ある意味頑張って、前は非常に厳しい数字だったんで

すが、今回は少しずつ何とか、特に国語、数学もなんとか少しずつ上の方に上がってきているかなと。相対的に見ると。中学校も数学が厳しいというのは先ほど山本委員もおっしゃっていましたが、これはずっとうちの課題なんですよね。やはりどちらかと言うと、受験と数学は結びつくので受験の競争が高い所は数学が高くなるという傾向にあると言われていて。我々としてもそういうような競争原理がなかなか働きにくい所の中で中学校の特に数学は家庭で勉強をしなければ、なかなか点数がとれない教科だというのは事実なので、この辺が現在の課題なんです。これについても、なんとか上に食らいついていこうというような、中学校でもそんな思いでやっています。なんとと言っても小学校であまりにも離されちゃうと中学校で全然追いつけないという部分があるので、まずは小学校でしっかりと他の所と肩を並べるようにして、中学校でもさらに上を目指したいと。今としては、そんなような方向でやっていて、少しずつそんな意識は学校にも浸透しているかなと思っています。

#### 【工藤 市長】

見方だから何とも言えないけれど、でも、元年度、3年度をどう見るかなんだけれど、どちらかと言うと、元年度は山の方に近い所に存在しているんだけど、3年度にくるとちょっと裾の方に来ちゃったなという感じなので、それをどう見るかはあなたたちが色んな取り組みをこれから期待するところだけれども。頑張っているのはよくわかるけれど、せめて平均に近づいてほしいなと。

#### 【伊藤 委員】

学校の努力はすごいと思うんですよね。学校でやれることはあるんですけど、そんなに多くなくて、学ぶ側の問題というか。門間さんも言いましたが、子どもたちの学ぶ意欲をどう育てていくかということの方が伸び率が高いと思ってまして、幼児教育をやっていると、幼児の時代に読書そろばんを早期にやると、小学校に入ってから成績が高いんですが、中学校の伸びが無くなって、周りに追いつかれてしまうという研究結果もあるので、中学校になるとその学ぶ意欲みたいところがすごく大きくなってくるなと。それをどう育てていくのかということも手立てをした方がより上げられる可能性は高まっていくかなと思うので、やっぱり門間さんが言うとおりの、乳幼児に対する、私が保育所でやっている幼児教育とかの所を、知識の詰め込みじゃなくて、自分でどういうふうに色んなものを体に取り込んでいくかという学び方や意欲を育てるというのもこれからの視点としてはあってもいいんじゃないかなと思っています。

#### 【山本 委員】

小学校ですと、読書とか割と学校の中でも結構やっている部分があるんですけど、中学校になったら全然なくなってしまう。今は、スマホなどに走ってしまうということがあるので、読解力とかそういうものがなかなか育っていかないというデータがあると思うんですよね。おそらく読解力がないから結局算数や数学の文章題だとか欠落してきているんじゃないのかなというふうには見える。やっぱり家庭教育とかそういうところに行きついてきちゃうのかなというのはありますよね。

#### 【工藤 市長】

それで言うと、一番特徴的なのは留萌管内だと思う。前回は今回もそうなんだけれど、人口規模とか

だと何も変わらない話だし、しいて変わるとすれば、道央圏との距離くらいかなと思うんだけど。あっちの雰囲気だってそんなに極端に高い印象もないのに、留萌は本当にちゃんと高い所に分布しているなど。何かそこから学ぶものはないのかなという気はするけどね。

#### 【表 教育長】

我々も気にはして、留萌は農業と漁業が基幹産業で我々とそんなに変わらない、人口規模も進学校があるわけでもないで、その中で今までもずっと平均して高いので、今は留萌からも先生方が入ってきてくれているので確かに教師の留まる率は向こうの方が高いというか、それは実際あるのかなと思っています。それと経済から言うと、オホーツク側は経済が非常にいいんだけど、そこが意外と学力が低いのと、反対に日本海側は厳しいんだけど、意外と学力が高い。この辺がどういうふうな地政学的に何かあるのかわかりませんが、そんなようなこともあるのかなとは思っています。旭川と札幌に近いというのもあって、留まる率が高いというのは授業力の差はあるのかなという気はしています。先ほどあったタブレットのギガスクール構想の中で一気に進んでしまったというのもあって、これをどうやって活用するかというのは全国すべての課題なんです。その中で佐賀先生もいらっしゃいますけれど、我々はここに稚内北星学園大学があるので、そことしっかりと連携するような方法も、まさにこのギガスクール構想こそ何とかしたいなど、新年度に向けてそんなことを考えているんですけれど。

#### 【工藤 市長】

確かに私たちにとってはテレビ会議みたいなのは本当にやりづらくて嫌なだけで、でも子どもたちの学習という意味では、1対1が常に成立するものだから、今までできなかったことがいっぱいできるような気がしてくる、教育上は。それは是非期待して言えるんですけれど。

#### 【門間 委員】

使いこなせてくる子と使いこなせない子と分かれてくる気もします。これから。タブレットや物や情報も含め、やはりその辺の活用する能力、リテラシーというふうにも言われていますけれど、そこも含めて目に見えるところとそうではないところ、きっと何層にもなっていると思うんですよね。最終的には人間としての生きていくうえで最低限の本能的な部分を充実させる必要がある。そこが満足でないとその上に乗っかっていく部分というか、意識をして自分をコントロールする理性とか、人間的な本能の部分が、ちゃんと安心できるような存在が充実されていないといけない。脳の仕組みがそうなので、結局人の体の仕組みと脳の仕組みに背いたことをやると、努力するとするだけストレスになってくることもあるので、やはりその辺も含めてつつこんでいって、バランスを取るように働きかけ、せっかく皆努力してやっていることがちゃんと人の生命活動に則っているかどうかというのは、これからそこを取り込んでいくところは本当に伸びると思うし、変わると思います。

#### 【工藤 市長】

難しい話だよな。

#### 【門間 委員】

難しくなるんですけど、シンプルな部分も実はあったりして、そういうところでやっていけるのが…。

【工藤 市長】

偉そうなことは言えないけれど、これからの社会って今までよりもっとストレスがあって、ストレスの塊みたいな社会で生きていかなきゃならない。そのときの子どもはどういう教育をするのかと。ストレスは駄目なんだということで何かを考えるのか、一定のストレスは避けて通れないんだと。100年前や200年前ののんびりした生活では生きていけないよという社会を選択しないと、学力の話とはまた別だけれど。そこをまた議論するとなると、本当に難しい話だなと思うんだけど。でもどっかではある程度そういうものも許容しないと、社会は本当に進むのかと。滞ってしまうだけだぞという話にもなりかねないので。エネルギーの話をしているみたいですね。

【門間 委員】

やはりストレスは悪いストレスだけではないので、知らないことよりも知ることによって選べる。自分で変えられること、変えられないことというのを仕分けして、変えられないことに一生懸命エネルギーを注ぐと悪いストレスになっていくので、変えられることと、変えられないことを自分で選べるかというところの力はすごく大事になるのかなと思いますね。

【工藤 市長】

それを学校教育の中で取り入れてというのは、1対1の色々な付き合いの中では、子どもを育てる上で当然意識しないといけないけれど、学校教育で取り入れることと言うと、先生の負担も、それこそ先生にストレスが溜まって先生が駄目になってしまうんじゃないかと思うけれど。難しい。

【伊藤 委員】

社会的なことになるんですよ。子どもが未来を描きにくい社会になっているというのは勉強に向かないというのはありますよね。目指すことが分かれば、努力はできるようになるので、そこが描きにくい社会になっているというのが大きな問題。そういう意味ではキャリア教育みたいなのは、非常に効果はあるかもしれないと気がしますよね。

【工藤 市長】

時間も時間ですので、もし言い残したことがあればお受けしますが、よろしいでしょうか。では次の項目に移りたいと思います。

## ②コミュニティ・スクールを活用した地域との連携について

【工藤 市長】

次が二番目のコミュニティ・スクールを活用した地域との連携ということですが。

【表 教育長】



これは我々がよく言う学校と地域の連携ということなのですが、よく言われるとおり、子育て運動のまちということで、ずっと学校・家庭・地域が連携して、子どもの健やかな成長を保障するよということとずっと今までやってきたんですけれど、その中心となっていたのが学校だと思えます。中には、校長先生や教頭先生が中心となってやってきてくれたんですけれど、やはり少しずつ時代が変わってきて、先ほど言ったように校長先生も宗谷管内ではなくて、2、3年のスパンで他の管内から来る先生方が増えてきた。そんな中では、やはり今までの様はずっと築いてきた子育て運動と言われる学校・家庭・地域の連携というのは、学校中心としてはなかなか取りにくくなってきているというのが今の学校現場の現状なんです。学校現場でそういう声が上がってきているんですね。その中で我々が進めてきた子育て運動をどうやって守り高めていけばいいのかという中で、コミュニティ・スクールというのを核にして、次の展開を考えたいなというふうに教育委員会として考えているところです。稚内は昭和59年なんです、子育て運動を大きく進めてきたのが。学校・家庭・地域という連携を進めてきた、ものすごく歴史の持っている町だと思っています。改正教育基本法が2006年、平成18年にできたときに改正教育基本法の中で初めて学校・家庭・地域の連携がこれからの教育に大事だということで、改正教育基本法13条に初めて学校・家庭・地域の連携というのが新設された条項なんです。そう考えると本当に私たちは、20年以上前を走っていたはずなんです、今言ったように少しずつその状況が出てきました。その中でコミュニティ・スクールというのも2004年に国が育てたい子ども像というか、目指すべき子ども像を学校と保護者と地域が共有して実現していく、そのための組織としてコミュニティ・スクールというのが必要ではないか。学校運営協議会を設置した学校をコミュニティ・スクールと言っています。学校運営協議会は教育委員会が規則を作ってこんなふうにしなないとならないんだけど、文科省が平成29年に法律を改正して、学校運営協議会の設置を努力義務として、義務化を一定程度定めています。そういう意味では、学校・家庭・地域が連携するというのは、我々の子育て運動の方針からしても今の国の方針からしてもこのコミュニティ・スクールに移行していくのが基本的に方向として合っているのかなというふうに思っています。ここにあるように、協議会を設置して委員を任命するというのは、教育委員会の役目なんですけれど、今のところこのコミュニティ・スクールというのは、運営協議会自体は各学校ごとではなくて中学校単位でいいとなっているので、ここで言うと、稚内中学校区に運営協議会を作れば、そこに中央小学校が入るみたいなそんな形でいいことになっています。そして委員は、ここで言うようにPTAの代表、地域住民、それからよく言われている地域コーディネーター、地域活動を一生懸命やっているような人をここに入れて、その中で色んな論議をしながら、学校の運営に協力していく。校長先生の運営方針をしっかりと理解して学校運営に協力する、共同で進めていく。そんなことがコミュニティ・スクールの大きな運営の方法です。それで何か変わるのかと言うと、今までもこういうことを組織化されていないけれど、子育て推進協議会とか各中学校区にあったんですが、実態少しずつ形骸化してきて、実際権限もないし、規則化もされていない。そういう中であれば、この運営協議会というのは、一定程度委員にもそれなりの権限や責任も持っていますし、校長も早々に動いて協議会の方針を尊重しなければならないということもありますし、そういうことで委員にはある程度、その学校の運営に責任を持つ、それらを含めて地域で学校を応援しようという気運がさらに高まっていくんだろう。そういう意味では、当然学校を応援するということは子どもたちを応援するんだというようなことが期待できると思っていますし、よく言われているのは先ほど伊藤委員もおっしゃったようなキャリア教育は、コミュニティ・スクールにすると色んな方々がこういう経験が出来るよとか職場体験一つにし

でももっと進んだ形で職場体験ができるよとか、自分の職業観とかしっかりとその地域で経験させてくれる。もっと言うと、その地域の歴史や文化をしっかりと子どもたちに語ってくれるとかそういうことであることに誇りを持つとかそういうことをコミュニティ・スクールには期待ができる可能性だと思っていますので、教育委員会としては、この方法を今後進めていきたいなど。北海道も今後コミュニティ・スクールを設置してくれと言うか、学校運営協議会を設置していく方向で進めてくれというような指導も来ておりますので、かつては子育て推進協議会というものがあったので、屋上屋を重ねるのかなと思っていた時期もあるんですが、今で言うと、逆に子育て運動の方向性をはっきりさせるためにもコミュニティ・スクール、学校運営協議会をうまく活用してさらに子育て運動と連動させるような取組を進めた方がいいのではないかと。これは教育関係者からもそういう方向でいいのではないかという意見ももらっておりますので、今回この場で是非皆さんのご意見を伺いたいなと思っております。

**【工藤 市長】**

教育長から内容について説明を受けたので、今の学校運営協議会の設置の義務化の方向に向かって国が進めているということも含めてご意見等、感想も含めてご発言いただければと思います。今度は門間さんからよろしくお願いします。

**【門間 委員】**

昔は、私が子どもの頃と言うとかなり昔ですけど、町内会とか学校以外の所で地域の人たちと自然と交わる場というのが日常的にあったと思うんですね。きっとそれは、子どもも多かったし、人口も多かったし、自然とそういうのが出てきてきたり、続いているものが続いてきたりという中でそういう場があったので、やはり今現状を考えると、仕組みを作って、そこでまずは動いていながら進めていく、きっと最初に色々決めてもそのとおりにいかないこともあると思うんですけど、まずはやっていくということはすごく大切だと思います。学校運営協議会を設置して動いていくことは大切なところの一つではないかなと思いました。

**【工藤 市長】**

ありがとうございます。では伊藤さん。

**【伊藤 委員】**

そうですね。門間さんが言われた昔と違う地域事情がたくさんありすぎるので、これは必然というか、こうなっていくざるを得ないんじゃないかという気がしますし、学校も閉じた社会ではなくて、地域に開いていかないといけない時代ではあると思いますので、これはこういう流れになるのかなというふうには理解をしています。ただメリット・デメリットがあると思いますので、デメリットをどう解消していくかというところを考えていった方が、やっていく中でまだどんなふうな形がいいかなんて正解が見えない段階なので、今までの子育て運動の基盤を使いながらうまくできると稚内らしいスタイルになるんじゃないかなと考えていますが、どんなものかあまり読めませんね。

**【工藤 市長】**

山本さん。

【山本 委員】

稚内の場合は、地域の子どもを育てる活動はもともと下地があつて、北地区や南地区でそういうのが前からありまして、この所コロナの関係でほとんどそういうのがされていないような状況なんです、そういうベースがあるということは、それを土台にしてですね、稚内の場合はそういうのを作りやすい場所なのかなとは思いますが。あとはお祭りの関係ですとか町内会自体もたくさん子供もおりましたので、それが色々な面で密接に繋げるときに、色々な話の中で相談できたんですけど、今そういうこともできない状況ではあるので、できればそういう風通しの良いというか、そういうような組織体であれば色々な部分で活用が出来てくるのかなということですね。今、自分は保護司をやっている関係もあるんですけど、この頃子供の犯罪も本当少なくなってきたみたいなんですけれど、かなりアンダーグラウンドと言いますか、表面には出てきてないのもあるところはあつたと思うんです。そういうのが全然見えてこないという状況ではあるので、そういうのをキャッチできるような仕組みというのは、絶対必要だなと。これからはさらに必要だと感じています。

【工藤 市長】

佐賀さん。

【佐賀 委員】

先ほど教育長がおっしゃったように先日潮見が丘地区の子育て連絡協議会があつて、行って来たんですけど、その中である種ここにいると当たり前と思うんですけど、地域の方とか関係する方々、本当に形だけじゃなくてきちんとその校区の中学校、小学校のことを考えて色々な意見の交換をしました。私は初めてこの委員になったんですけど、そう感じました。そういう意味で言うと、学校運営協議会もこれは稚内市の子育て運動の成果なんだと思いますけれど、その下地は十分にあると思いますので、これをするのは、そんなに大変じゃないのかなという気もしますけれど、伊藤委員がおっしゃったようにもしデメリットがあるのであれば、それはうまく解消してより良いものにしていければというふうに思っていました。本当に関係する方々の思いはすごく感じて、これが本当にコミュニティ・スクールなんじゃないのというふうに思ったところでした。

【工藤 市長】

ありがとうございます。皆さん肯定的なご発言が多いんだろうなと思って、私の意見というか受け止め方をお話すると、それぞれの学校に学校を運営する基本方針が、もともとそんな個性豊かな学校があつちにもこつちにもあつたのかなというのが最初に疑問だったんですけど、嫌味を言っているわけじゃなくて、先ほど来、皆さんのお話のとおり、子育て運動というのはある意味草の根運動でそれを当時の先生たちがやりたいと発案してそれを支えた方々がいっぱいいて、結果として今日まで続いたということはこれは本当にすごいことだなと思っているんですけど、もし学校運営方針が必要なんだとしたら、私は先ほどの話にも出ていたけれど、わがまちで言えば、例えばキャリア教育を幼から大まで一貫して取り組んでいくと、そういうものがこのまちのそれぞれの学校の運営方針の中で生かされていて、

それに対して、じゃあどうだこうだということがこういう協議会で語られたり、議論されたりというのは非常にいいことだなと思うんだけど、法律でそういう協議会を作れという押し付けにならないのかという心配はあるなと思っています。これそのものが悪いとか良いとかということではなく、まさに協議会の運営は本当に難しいだろうなと。色々な人が中学校区で一つと言いながらも様々な意見があるわけだから、できれば子育て運動と同じようにこのまちはこんなような方針で子どもたちを教育していくんだと、それは校区に限らず全市的に同じような方向性をもってそういうものが機能してくれるならそれは素晴らしいことだと思うんです。その辺心配事もひっくるめて意見として言わせていただきました。

#### 【表 教育長】

今の話でやっぱり、この前も教育関係者と話したときに子育て運動と連動していくべきだろうと。誰が実際にやっていくのかということになると、その地域のある意味ではコーディネーターみたいな、それを引っ張れるような人が必要なんだろうと。そういう人たちを育成できるようなことが行政としては、必要なんじゃないのかなと。今言ったように同じような目的意識をもったような人たちが引っ張ってくれているようなことが必要かなと思う。その地域コーディネーターを作っていくということも一つ大きな今後の課題となってくるのかなと。今までは、その地域ごとにリーダーみたいのがいて、やってくれていたんですけど、少子化とともに子育て世帯がなかなかいなくなってきたというのもあるので、それらも含めて地域と言いますか、ある意味では、シニア世代の活躍の場としても重要なかなと思っています。

#### 【工藤 市長】

ここで話をするのが良いことかわからないけれど、同じではないけれど、他の学校でも今も失敗例として反省しながら今後も話を考えていくんだけど、意味合いは違うかもしれないけれども、うちが私の時代じゃなくてその前の市長の時代から取り組んだ運動にまちづくり委員会があるんですね。まさに中学校区を基本として、このまちの中を15の区域に分けて、当時何が一番世の中で騒がれていたかと言うと、地方分権という言葉だったんです。今はほとんど語る人もいないんだけど。当時の状況で言えば、財政も厳しいし、何でもかんでも行政がやるということはできないんです。だから地域でそれぞれ考えましょうと。それは皆で地域の課題をとらえてくれて、出来れば我々は、今までのように上げ膳据え膳ではないんだけど、多少の予算は提供しても皆地域で地域のことを考えましょうと。同じ空気を吸っている人たちがやりましょうという話で当時よく議会でも色んな話にもなって、当時の話でいけば、中央集権を作るのに日本は50年かかったと。それを今後地方分権にするというのはまた50年かかるんです。だから、そんな今すぐできるような話じゃない。50年かかるような運動なんですと言いながら、がんがん議会で揉めて取り組んだんですけど、結局時間が経てば経つほど何をやっていいかわからなくなって今はやってくれている人には申し訳ないけれど、ほぼ空中分解みたいな状況に陥っちゃっているんでそういう意味では、そこの校区の人たちがみんなで考えるというのは、それは大事なことです。当たり前なことだと思うんだけど、なかなかそれを維持するという事は、教育長が言ったようによっぽどしっかりした意志と知識と、コーディネーターの話もひっくるめて取り組んでいかないとイケない。難しい話だろうと。それを教育委員会だけが引っ張っていくなんて言う話にはもちろんならないなと言う感じを、聞いていて思いました。

**【表 教育長】**

今市長がおっしゃったことを含めて、その方向性はもう一度市の中でも協議をしなければいけない話なんですけれど、国も北海道もこの方向性の中でやっていくべきだという方向性は出されているので避けては通れないところで、うちらとしては、さっき言った下地があるということなので、もう少し具体性を持った、もっと具体的にこういうふうにしていくんですということも含めて、早急に案を出していきたいなど。

**③学校における諸問題について【非公開】**

運営要綱第5の規定により非公開

**(2) その他**

※意見なし

**4. 教育長あいさつ**

**【事務局（企画総務部副部長）】**

以上で、本日予定している協議事項は、全て終了いたしました。それでは最後に教育長の方から一言ご挨拶をお願いいたします。

**【表 教育長】**

今日は色々な意見が出て、大変有意義な会議ができたと思っております。学力の問題、コミュニティ・スクールの問題については、我々の大きな課題でもあるし、コミュニティ・スクールは要するに子育て運動をさらに発展させていきたいなという思いであります。よく教育は百年の計と言われるように、人を創るというまさに国家の基本にもありますし、地域づくりの基本だと思っております。是非市長におかれましてはまた教育全般の振興に対しまして、改めてご支援ご尽力をお願い申し上げまして、一言お礼のあいさつとさせていただきたいと思っております。よろしくをお願いいたします。

**5. 閉会のことば**

**【事務局（企画総務部副部長）】**

長時間にわたりありがとうございました。以上をもちまして、総合教育会議を終了いたします。本日は、ありがとうございました。